大塚敬節
矢数道明 責任編集

近世漢方医学書集成

18

原南陽一

名著出版刊

南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成　第Ⅰ期・全30巻

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 18　原　南陽(一)　第Ⅰ期 全30巻

昭和五十四年三月二十三日　第一刷発行
昭和六十年十二月二十五日　第三刷発行

編者　大塚敬節
　　矢数道明
発行者　中村安孝
発行所　株式会社　名著出版
　　東京都文京区小石川三ノ十ノ五
　　電話東京(八一五)一二七〇番(代)
　　振替口座　東京七―一〇七四六番

製版所　株式会社　日本写真製版所
印刷所　有限会社　伊藤印刷
製本所　株式会社　辻本製本

予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01211-6 C3347

責任編集

大塚敬節

矢数道明

編集委員

山田光胤

寺師睦宗

大塚恭男

矢数圭堂

松田邦夫

原南陽肖像

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

凡　例

一、本書第十八巻「原南陽㈠」には、『叢桂亭医事小言』巻之一～巻之四上までを収録した。

二、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。

イ、新たに柱と頁数を付した。

ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。

ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。

ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。

ホ、印刷不明な箇所は、他の版本により補正したところもある。

一、底本は次の通りである。

叢桂亭医事小言　版本（嘉永七年版）　七編八冊（矢数道明所蔵）

一、解題は、松田邦夫（日本東洋医学会理事）が執筆した。但し、収録著作の解題は、本巻第十八巻「原南陽㈠」及び第十九巻「原南陽㈡」・第二十巻「原南陽㈢」に収録した書目についてまとめて本巻に記した。

一、巻頭の原南陽肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』（昭和十一年、刀江書院。昭和五十二年、国書刊行会複刻）によった。

解説

松田邦夫

原南陽 小伝

原南陽は、学医と云うよりは、むしろ疾医、すなわち漢方の臨床家としての大家である。彼が世に出たのには興味ある逸話があり、またその著書には今日も私達を教えるものが多い。

原南陽は、名は昌克、字は子柔、通称は玄璵と云い、南陽は号である。

宝暦三年（一七五三）に生まれ、父は昌術と云い、水戸侯の侍医であった。祖父も医師であったので、三世の医であったわけである。しかし原家の先祖は武士で、甲斐の名将であった。当時武士は貴い職であり、医は小技賤技という観念があったから、医をもって禄を食むのは先祖に対して面目なしと考え、家を離れて京都に遊学した。京都は当時、学術の中心地であった。そこで山

原南陽の遺墨（矢数道明氏蔵）

脇東洋の子、山脇東門について医術を修め、産科を賀川玄悦について習った。

学業がひと通り終ってから江戸に帰り、小石川に裏店を借りた。しかし、他から来た開業したての医者がはやるわけもない。吉益東洞も、何年か人形作りの内職をして暮らしたということであるが、原南陽もお定まりの貧乏暮らしで、按摩鍼灸によって辛うじて生活を立てていた。

すでに香川修庵は、按摩を治病の一術として用いることを唱え（『一本堂行余医言』）、南陽の師事した山脇東門も、三稜針を用いて瘀血を取ることを称揚し（『東門随筆』）、賀川玄悦、賀川玄廸共に、按腹を産科に賞用しているので、南陽はこれらの影響を受け、針灸按摩の類をよくしたであろうことはうなずかれる。

さて江戸時代の名医、賀川玄悦、戸田旭山、原南陽等は、不遇時代に按摩を業としていたので、世人は彼等を称賛して、按摩の賤業から身を起こして、天下の大医になったという。だが按摩は彼等にとって、果たして賤業であったであろうか。

彼等はなぜ按摩を業としたか。生活に困窮したということは、勿論原因の一つではあるが、単に生活に追われたというだけなら、他に仕事はいくらもあったはずである。口を糊する方便とし

て、彼等が按摩業を営んだというのであれば、後年大医として天下に名声を馳せることは、恐らく出来なかったであろう。

按摩を業とすることによって、彼等は先ず人間として錬成された。万巻の書を読破しても、人間として錬成されなければ、大医とはなれなかったであろう。

次に按摩を業とすることによって、彼等は生体にもとづいて解剖生理を研究した。これは非常に大切なことで、賀川玄悦が正常妊娠の胎位を発見したのも、彼が按摩の妙手であったからで、もし彼が按摩でなかったら、産科の泰斗にはなれなかったであろう。死体解剖により人体の構造を研究することは、勿論必要なことであるが、生きたままの人体にもとづいて解剖生理を知ることは、更に必要なことである。この意味で、彼等は按摩をすることによって、今日の基礎医学を研究したのであって、この間の修業が後年大医となるために、大いに役立ったのである。

次に按摩することによって、指頭の感覚を鋭敏ならしめ、その結果、腹診は精妙を極め、病的な硬結、拘攣等を正確に知り得るに至るのである。それゆえ彼等は、按摩から身を起こして天下の名医になることが出来た。

× × ×

それでは原南陽は、如何にして按摩から身を起こすに至ったのであろうか。ここに有名な逸話がある。

若き日の南陽は、京都において学んだすぐれた学力を持ち、大いに志すところがあったが、業

未だ行なわれず、不本意な日々を過ごしていた。南陽は非常に酒好きで、居酒屋に日参をして気炎を挙げていた。そしてその酒屋で知り合った飲み友達に水戸侯の役人がいた。それより水戸藩に出入りし、時々家老にも招かれるようになった。もともと彼は和漢の書籍を熟読していたので、何を語っても面白く、次第に按摩治療にゆく所もふえて、毎日の酒代に困らなくなった。

ところがある時水戸侯が江戸で、暑さに負けて急に病気になった。そこで官医や町医師など江戸の名医大家を呼んでいろいろと手を尽くしたが、さらに効なく人事不省で危篤になった。このとき家臣の某が南陽を推薦して云った。「近頃南陽と云う医者がある。今は落ちぶれて按摩を業としているが、聞くところによると三代の医であるとのこと。平生その語る所を聞くにすこぶる識見がある。諸大家が匙を投げたのであるから、試みに彼を召して治療を託されては如何か」と云うことになって、急いで使者を南陽のもとへ遣わした。その時南陽は昼寝をしていたが、使者にあらましの容体を問い、直ちに支度をして、行きがけに、肥巴豆三粒、杏仁三粒を銭九文で買い、これを懐にして水戸藩に至り、先ず用人の所で服を改め、それから水戸侯の御前に上がって診察をした。

その時南陽は、「これは乾霍乱の証であるが、実満のこと故、定めし御全快になるであろう。しかし、侯に差上げる薬方名は今は申し上げられない。後程御回復の上で申し上げる」と云って、懐中より巴豆杏仁を取り出し、茶椀の中でよくつぶし、熱湯でかきまぜて差上げ、一時間ほど経てば吐瀉をされる。そうすれば御病気は平癒されると云った。そしてこの様に殿様のおそばでは

窮屈だから、御台所の隅ででも御酒を一升ばかり熱燗で頂戴してお待ちしたいと云って御前を下がった。その後、果たしてその言のように吐き下しがあって、侯の病はたちまち回復してしまったので、並びいる大家達も感服歎賞した。その時の処方は走馬湯であった。もし薬を差上げる前に走馬湯だなどと云えば、他の医者がそんな峻劇な薬剤は差上げられないと反対するにきまっていると承知していたので、黙って投薬したのであった。市井の一鍼医の身で、水戸侯の危症に臨み、このような劇剤を投じ、悠々としていられた。南陽の自信、治術の非凡が窺われる。

このことがあって水戸侯は南陽を信頼し、侍医に抜擢して五百石を与えた。九文の元手で五百石に成ったことが当時云いはやされた。

走馬湯、治二胸腹有レ毒者心痛若腹痛者一

杏仁二枚　巴豆二枚　（金匱要略）

この処方は、大正天皇の御幼時、脳症を発せられた時、明宮尚薬奉御であった浅田宗伯が、献じて偉効を得た峻剤である。宗伯はこの時、斎戒沐浴し、成田不動尊に祈願をかけ、常に白無垢と短刀を内着し、万一のときは直ちに切腹の覚悟をしたと云う。当時の宗伯の心構えが偲ばれる。

明治の日本、当時上下の信望と期待を一身に担い、皇太子の病床で白衣懐剣、斎戒潔浄の身で、不動明王を念じつつ、この峻下剤を献じた宗伯の厳粛な態度と共に、私は尊敬の気持を覚える。

× × ×

原南陽はこうして親譲りではなく、実力を認められて侍医になった。浅田宗伯は『皇国名医伝』

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

の中で南陽を、「その技倆は卓越し、高名は東国をおおい、医書については文章にこだわらず、専ら適用を主とした。」と著わしているように、実践を重視した医家であった。侍医の職に在ること三十余年、文政三年（一八二〇）八月十六日、病で歿した。行年六十八才である。

原南陽の墓（石原弘氏撮影）

南陽は前述のように、先祖が武士であるのに、自分が医で禄を食むことを内心恥じていたが、水戸侯はその心を汲んで、南陽の子昌綏を武士にとり立てた。南陽がこれに感謝して著したのが軍陣医書の『砦草』である。昌綏は後に昇進して軍師となっている。

× × ×

次に原南陽の時代と考えについて述べる。

そもそも南陽が医を志した頃には、古方の四大家といわれた後藤艮山、香川修庵、山脇東洋はすでに世になく、一代の医傑、吉益東洞も晩年で、南陽が二十才のとき永眠した。

しかし、東洞の学統を引く中神琴溪、宇津木昆台、中西深斎、村井琴山、和田東郭、吉益南涯など英才が続々と輩出して、百花斉放の観があった。

吉益派の後継者たちは、「毒によって病の毒を攻める」過激な東洞の学説に修正を加え、治療法にも不備を補ないながらも、東洞の「直接な経験を基礎とし、事実に即した医学」の精神をふまえて、日本化した漢方の完成に到達しつつあった。

一方、同じ古方の流れをくむ山脇派は、親試実験の精神から発展して、新しいオランダ医学に接近していった。

このような背景と環境の渦の中で、南陽の医学が「余が学ぶ所は方に古今なし其験あるものを用ゆ」という親試実験の哲学に貫かれていくのは当然である。

南陽が医のメッカ、京都で師事したのは、山脇東門と賀川玄悦であった。

南陽の生まれた翌年、宝暦四年(一七五四)、東門の父山脇東洋は、京都六角獄舎前でわが国初の腑分を行ない、先入観にとらわれず、事実に学べという貴重な実証精神を日本医学に植えつける端緒を開いた。山脇派は以後、機会あるごとに人体解剖を行ない、その子東門も明和八年(一七七一)、安永四年(一七七五)、同五年(一七七六)に解剖を行なっている。

賀川流産科の祖、賀川玄悦は、胎児の正常胎位(背面倒首)を世界で初めて発見し、その他数々の産科手術の創案など、我が国医学が世界に誇りうる輝やかしい功績を残した医家である。玄悦は、まったく独創的に綿密な触診法と科学的観察により、事実を自ら験して確認するという実証精神に満ちあふれた医学を推し進めた。

医史学の泰斗、小川鼎三博士はこの時代をいみじくも「日本のルネッサンス」と語っているが、

実に的を得た名言である。

南陽が自著の中で「方は狭く使用することを貴ぶ、約ならざれば薬種も多品になる、華佗は方数首に過ぎずと云ふは上手にて面白き事味い知るべし」「学んで是を約にするを第一の学問とす」といった簡約を旨とする思想は、東門と玄悦の推測・臆見を排した徹底した実証主義から会得したもので、和田東郭の医学思想とオーバーラップして、名人上手に共通するものを覚える。

歴史の偶然というか、つい三年前（昭和五十一年）京都において、山脇東門の父、東洋の「観臓記念碑」が腑分をした六角獄舎跡に建立された。そして昨年（昭和五十三年）、京都府医師会が中心となって「賀川玄悦歿後二百年祭」が華やかに開催され、注目をひいた。

南陽の親試実験医学を開花させた二人の先哲の偉業が、たて続けにフットライトを浴びた出来事は、南陽の精神の万分の一でも継承できたらと考える筆者にとり、感無量の思いである。

原南陽の著書

昔の医者をしらべる時は、詳細な伝記があるわけではないので、その人の考え方や人柄は、その残した著述によらざるを得ない。

筆は立つが、術は至らないということもある反面、名医であったり、人格がすぐれていても、著書がなければその人の名は残らない。医術は下手でも、学問が出来て書物を残すと、その人は

歴史に残ることになる。

ともかく南陽の著書としては『叢桂亭医事小言』『経穴彙解』『叢桂偶記』『瘈狗傷考』『傷寒論夜話』『砦草』『解毒奇効方』等があり、その他、『叢桂亭薬語』『寄奇方記』『痘瘡策』『脚気編叢記』『西遊雑記』等がある。これだけの著書があるのは少ない方ではない。しかも南陽は、すぐれた臨床家である。

叢桂亭医事小言

南陽の著書で最も親しまれているのは『叢桂亭医事小言』で、享和三年（一八〇三）南陽五十一才の時の出版である。

この書物七巻は、南陽口授、門人筆記校正の形をとり、門人を集めて講述したものを筆記したのであろう。『療治茶談』の著者、津田玄仙の序文があり、それによると、津田玄仙の妻が難病を患い、偶々南陽に診て貰ったところ、非常に速く治った。そこで玄仙も、南陽の非凡な伎倆に承服したと云うことが出ている。

この書物は、漢方を学ぶ人には一つのテキストとも云うべきもので、医学の総論、診断法より始まり、各論で疾病別に治療法が書いてあり、南陽の医学を最もよく知ることの出来るものであり、和文で読み易い。

山田業広は『医事小言補正』（本集成第十九巻収録）の中で、

自分は若いとき家が貧しく修業の費用が乏しかったので、南陽先生の医事小言を師友のように思って病人を取扱った。その後他に色々学んで、治病の自信を得た後は書斎に積んだまま久しく顧みることはなかったが、ある時、弟子達に治療の話をしようとしてこの書を取り出して読んだところ、過激な議論や奇説の習いなく、ただ実験の説のみで、一つも虚飾の言がなかった。と称えている。

南陽は、「余が門にて初学の童子には先ず傷寒論を暗記さするなり」と、はじめに古方を尊重することを示し、ついで、「方に古今なし、その験あるものを用ゆ」と云い、「されども方は狭く使用することを貴ぶ。」と述べている。

診断学も、今日から見てももっともなことを書いている。脈を診るのは初心者にはむずかしいが、だからと云って、どうせわからないという心持で見てはなおさらわからない。平生からよく気をつけて、健康人の脈で診かたを覚えなさい。結脈は恐れなくてよいが、代脈は要注意であると門人達を教えている。

按摩のところで述べたように、南陽は腹診の妙手であるが、たとえば、「津液の尽きたる腹は、羽をむしりたる鳥の胸を撫づるが如し。極虚の凶候とす。この手ざわりは……死に近き人の手足の肌にもあるものなり。死人の肌を撫でて覚ゆべし」と教えているのはさすがと思われる。

臨床家としての彼の鋭さは随所に見られるが、「病因」の項で、「病因かくれたるは知れ難きことあり」として、七十二才の老人の事例を挙げ、衆医が診断がつかなかったものを宿食と見破っ

て治療したのは、腹診の上手なことと、病歴のとり方が緻密なためによるものであり、また「主客」の項で、一婦人が発汗やまず、衰弱し、当人も助からないと思っていたが、寒熱がきてから発汗することにより、汗は兼証で、寒熱が主証であることを見抜いて治癒せしめている。

そして病人に対する心構えとして、「無心にて影の鏡に映ずるが如くすべし。心中一物の客気あれば必ず誤る。」（「婦人」の項）と弟子達を戒めているのは、かつて自身水戸侯の初診時に態度で示したところである。

各論について、山田業広は、「ただし傷寒の部粗略、痘疹の部古方のみを用いたるは当時古方家の流弊を免れず、麻疹の部軽症のみを見て重症の畏るべきを知らず。」と述べている。

南陽が「傷寒」の部で、補剤の乱用を戒めているのは、彼のすぐれた見識を示すものである。「傷寒は直ちに邪気を逐うこと専務なり。」「人参を去って用いんとすれば、病家狐疑して決せず。富貴の人は猶更人参と云えば、大事に取扱って治療するぞと思う。故に十中七八は死す。」「虚弱な人ほどその邪気に堪えかぬる故、速かに攻めざればならず。」「たとえば邪気のあるは戦の最中の如し。その賊を退治せぬ内は静謐せず。如何に補薬が宜しきとて戦の済まぬに、礼楽をもって治めようとするの類なり。礼楽は宜しけれども乱世には用いられず。治世になりたる時こそ人を教化するの道具なり。」

また「傷寒」の項で、病人を死なせたことを深く反省し、それより道が開けてきたくだりは、和田東郭が水腫の治療に絶望して、一年間治療を辞し工夫した話を想起させる。いつの時代も医

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo